

ネズミザメ・ニシネズミザメ 全水域

Salmon Shark, *Lamna ditropis* & Porbeagle, *Lamna nasus*



ネズミザメ



ニシネズミザメ

管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)
みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT)
北西大西洋漁業機関 (NAFO)

最近一年間の動き

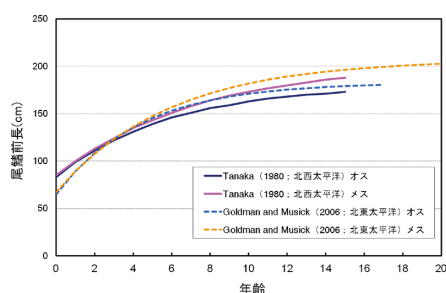
ネズミザメは我が国での水揚げ量は 2001 年頃までは緩やかに増加したが、その後は横ばい状態である。2011 年の水揚げ量は震災の影響により前年の 60% 減の 1,136 トンであった。ニシネズミザメについては、2012 年に資源評価は行われていないが、みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT) の生態学的関連種作業部会会合において、ミナミマグロ漁場で混獲されるニシネズミザメの資源状態に関する議論が行われた。同会合において、南半球のニシネズミザメの資源評価に向けた取り組みを行うことが合意された。2013 年 3 月、ワシントン条約 (CITES) 第 16 回締約国会議において、ニシネズミザメを付属書 II に掲載する提案が EU を始めとする国々によって提出され可決された。

生物学的特性 (左: ネズミザメ/右: ニシネズミザメ)

- 寿命: 雌 20 年、雄 25 年以上/
雌雄 20 ~ 46 年以上 (北大西洋)、最大 65 年 (南太平洋)
- 成熟年齢: 雌 6 ~ 10 歳、雄 3 ~ 5 歳/
雌 13 ~ 18 歳、雄 7 ~ 11 歳 (50% 成熟年齢)
- 繁殖期: 交尾期: 9 ~ 11 月 (ニシネズミザメ)
出産期: 3 ~ 5 月 / 4 ~ 6 月 (北大西洋)、6 ~ 7 月 (南太平洋)
- 索餌場: 両者とも温帯・寒帯域
- 食性: 両者とも魚類、頭足類
- 捕食者: 調査中

利用・用途

肉はソテーやみそ漬、鰭はフカヒレ、脊椎骨は医薬・食品原料、皮は革製品



ネズミザメの年齢と成長 (田中 1984, Goldman and Musick 2006)

漁業の特徴

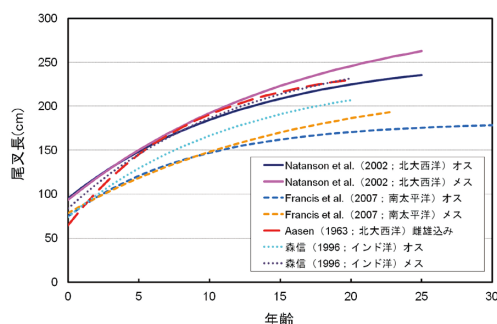
ネズミザメは、主にはえ縄と流し網の両漁業で漁獲され、我が国では宮城県の気仙沼港を中心とした東北地方に水揚げされる。さめ類の中では肉質が良好で比較的商品価値が高い。ニシネズミザメは、日本のまぐろはえ縄漁船が北大西洋と南半球の亜寒帯域で混獲しているが、持ち帰る程の価値はないようで、多くは海外の港に水揚げされているようである。

漁業資源の動向

我が国の主要漁港へのさめ類の漁法別・魚種別水揚げ量の調査では、1992 ~ 2011 年のネズミザメのはえ縄及び流し網による日本への水揚げ量は、それぞれ 290 ~ 2,930 トン、280 ~ 1,590 トン、全体では 1,140 ~ 4,410 トンであった。全体として 2001 年頃までは緩やかな増加傾向が見られ、その後 2009 年までは増減を繰り返しながら横ばい状態であった。さめ類の合計値に占めるネズミザメの割合は 15 ~ 26% であり (2002 ~ 2011 年)、ヨシキリザメに次いで多かった。

資源状態

我が国漁業で漁獲される北太平洋のネズミザメと、ミナミマグロ漁場で混獲されるニシネズミザメの漁業データを分析した結果、標準化した CPUE に顕著な増減傾向は認められず、この 1990 年代前半 ~ 2000 年代中盤または終盤にかけてこれらの海域で両資源は安定的に推移していたと推定された。一方、北大西洋のニシネズミザメは資源の減少が指摘されており、資源の水準は B_{MSY} を下回る状態である可能性が示唆されている。南大西洋のニシネズミザメについては、一部の地域で資源の減少を示唆するレポートが出されているが、データの不確実性が大きいので資源水準に関しては結論が出ていない。



ニシネズミザメの年齢と成長

(Aasen 1963, 森信 1996, Natanson *et al.* 2002, Francis *et al.* 2007)

管理方策

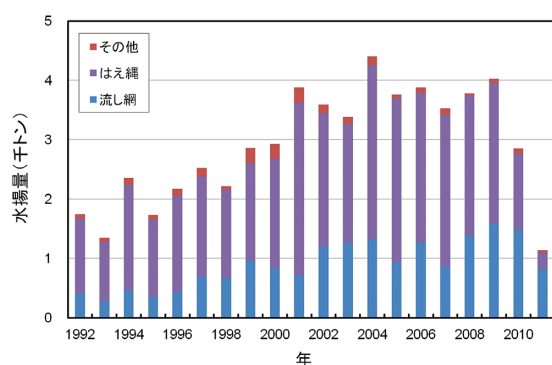
ネズミザメに関しては、現在管理方策は実施されていないが、宮城県気仙沼を中心として国内の水揚量・サイズデータの収集を行い、モニターを継続している。資源状態が悪化している北大西洋のニシネズミザメの漁獲死亡の多くは、加盟国国内におけるニシネズミザメを対象とする漁業によるものと考えられており、これらの国に対しては、当該漁業への新規参入は禁止するとともに、漁業国が国内資源評価によって独自に設定している TAC（北大西洋：カナダ 185 トン・米国 11.3 トン、北東大西洋：EU 2010 年より 0 トン）を遵守すること、漁獲量を正確に報告することが求められている。一方で、本種を混獲物として扱う漁業国においては、混獲回避手段や漁獲死亡率を低減するための調査研究の推進が求められている。資源評価に必要な種別漁獲量等の統計資料が不十分である点が最大の問題であり、今後は資料収集方法の改善も含めて検討していく必要がある。ニシネズミザメに関しては、CITES 第 16 回締約国会議において本種を附属書Ⅱに掲載する提案が提出され、可決されたが、資源水準の低い北系群については ICCAT/ICES の科学委員会が資源管理措置を勧告していること、南系群については CPUE が安定した傾向を示しており附属書Ⅱへの掲載基準に合致しないと考えられることから、わが国は漁業管理機関による科学的情報に基づいた資源評価・管理による本種の持続的利用を支持するものである。

資源評価まとめ

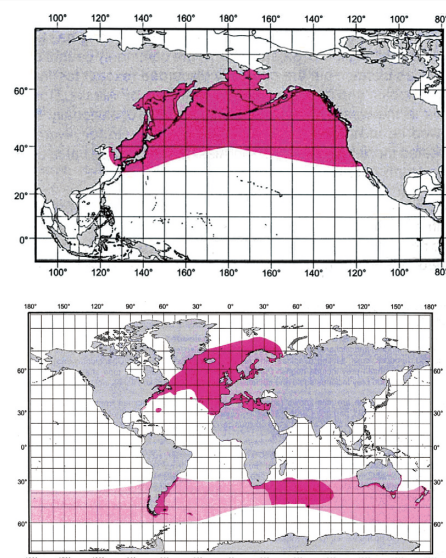
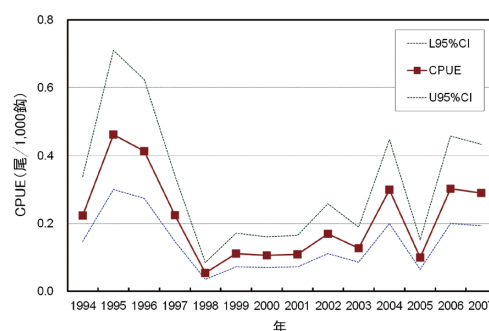
- 北大西洋のニシネズミザメについては、資源水準が低い状態にある。
- 南大西洋のニシネズミザメについては、一部の海域で資源の減少が示唆されているが、資源水準は不明である。
- ネズミザメ及び上記以外の海域におけるニシネズミザメの資源動向は横ばいであると推定されている。

資源管理方策まとめ

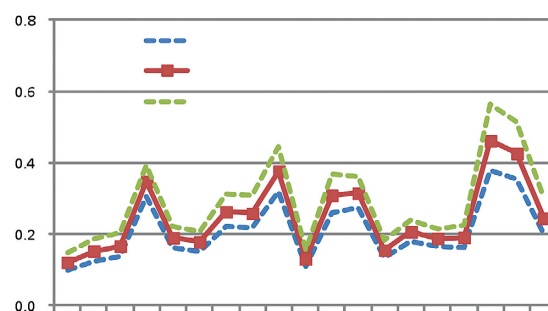
- ネズミザメに関しては、国内水揚量等を引き続きモニターしていく。
- ニシネズミザメに関して、北大西洋では TAC による管理を実施、漁獲量の正確な報告が求められている。その他の海域においては保護・管理に関する特別な勧告は出されていないが、引き続き資源状態を観察していく必要がある。



日本の主要漁港へのネズミザメ水揚量

ネズミザメ（上）とニシネズミザメ（下）の分布
(Compagno 2001)

北太平洋における日本のえ縄漁業データをもとに標準化したネズミザメの CPUE



ミナミマグロ漁場において、日本の科学オブザーバーが収集したデータをもとに標準化したニシネズミザメの CPUE

ネズミザメ（北太平洋）、ニシネズミザメ（北大西洋・南半球）の資源の現況（要約表）

	北太平洋	北大西洋	北東大西洋	南大西洋	その他南半球
資源水準	調査中	低位	低位	調査中	調査中
資源動向	横ばい	回復傾向	調査中	減少	横ばい
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	調査中	70 ～ 510 トン 平均：320 トン		調査中	調査中
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	1,140 ～ 4,030 トン (水揚量) 平均：3,070 トン	調査中	調査中	調査中	調査中